

# 知覚動詞の受動態

葛西清蔵

## 0. はじめに

本稿は知覚動詞の受動態について、つぎの二点を考えようとするものである。まず、つぎの例をみよう。

1. a ?Nureyev was seen by thousands to dance in the concert hall.
- b Nureyev was seen by a reporter to leave by the side door.

Kirsner (1977:176) によると、知覚動詞の受動態は「偶然性」の意味をもつが、多くの人々がダンスを見るつもりででかけるという「意図的」な行動をあらわす (1a) では許容度はひくくなる。しかし、(1b) のように、横口からでるところをレポーターに見られるという偶然的な表現とは意味的に衝突せず、許容されるという。

しかし、以下でみるように、この議論には重要な点の検討が欠けており、正当性は少ないことを論じる。これが一つめの点である。

二つめは、一つめの議論をふまえて、さらに基本的なことを考える。

2. a They saw her go.
- b She was seen to go.
- c \*She was seen go.

(2a) の受動態は (2c) ではなく (2b) だとされているが、(2a) の能動態にはない 'to' がなぜ (2b) ではでてくるのかについて説明されることはない。(2c) が非文とされ、このような受動態は存在しないのは事実か。存在しないとすれば、それはなぜであろうか。これを論ずるのが二つめの点である。

### 1.1 「偶然性」と問題のありか。

3. a I saw a flash of light.
- b ?I watched a flash of light.
- c I watched the flash of light.

Kirsner & Thompson (1978 : 183-184) は、(3a)、(3b)、(3c) の文から、「(たまたま) 目にする」の意味をもつ 'see' には不定冠詞のついた「予期 ('anticipated') しない」'a flash' が相応しいが、「(意図的に) じっと見る」の意味をもつ 'watch' と「予期しない」'a flash' とは共起しにくいという。これは、意味的には、

4. a Henry saw the accident. (i.e. an unexpected event)
- b ?Henry watched the accident. Kirsner (1977: 175)

(4a) の「予期しない」出来事は 'saw' に相応しいが、'watched' には相応しくないことではっきりしており、まちがいではない。また、これは、

5. a Joan saw Bill burst into the room unexpectedly.
- b ?Joan watched Bill burst into the room unexpectedly.

などによっても確認されている。'see' には「予期されない」ことが相応しく、'watch' には「予期される」ことが相応しいのである。しかし、このことから、

6. a ?Nureyev was seen by thousands to dance at the concert hall.  
(=1a)
- b Nureyev was seen by a reporter to leave by the side door. (=1b)

どうして、知覚動詞の受動態は「偶然性」の意味をもつことになり、(6a)、(6b)の許容度のちがいがおこることになるのであろうか。つぎの文を出発点にして批判的に検討してみよう。

7. a Nureyev was seen to leap across the stage.  
b \*Nureyev was watched to leap across the stage.  
c He was seen to draw a circle.  
d John was watched crossing the road.

(7a) で ‘to leap~’ の動作が見られることを意識した意図な動作であるかどうかは明確ではないが、(7a) が許容されているということは、この文では、Kirsner (1977) にしたがえば、「予期されない」行動であることになる。それであれば、(7a) が許容されるように (7b) も許容されなければならないはずであるのに、許容されないのはどういうわけであろうか。

もし ‘see’ の「非意図性」、‘watch’ の「意図性」というちがいが (7a)、(7b) の許容度のちがいの原因になっているとすれば、知覚動詞の受動態がもつ「偶然性」が (7a)、(7b) の許容度のちがいの原因でないことになり、Kirsner (1977) の主張はなりたたないことになる。

また、(7c) が許容されていることに注目しよう。Kirsner (1977) の主張によれば、(7c) において、‘to draw a circle’ は、見られることを予想しない、「予期されない」行動でなければならないことになる。ところが、この場合、円を描くことが「予期されない」行為であるとは考えにくい。

さらに、to 不定詞をふくむ (7b) が非文で、現在分詞をふくむ (7d) が許容されるということは、許容されるかどうかは、to 不定詞かどうかがかかると

わっていることを示していることになる。

以上の点から、(1a)、(1b)、(7b)の許容度のちがいが、知覚動詞の受動態がもつ「偶然性」の問題でないことは明白である。むしろ、

① ‘see’ と ‘watch’ の意味の基本的なちがい、

② to 不定詞の性質、

に問題がひそんでいると考えられる。以下では、このことを中心に考える。まず、to 不定詞についてみる。

### 1.2.1 to なし不定詞と to 不定詞

8. a They saw her go.  
b \*They saw her have gone.  
c They agreed to go.  
d He helped me climb the stairs by propping me up with his shoulder. (He climbed with me.)  
d' He helped me to climb the stairs by cheering me on.

Bolinger (1974a: 75)

(8a) で ‘go’ は時間的に ‘saw’ と「同時」でなくてはならない。(8b) が非文であることからわかるように、過ぎてしまったことを見ることはできない。「見る」には、まさに「同時」に自分の目でみる、つまり「直接知覚」しなくてはならない。これに対し、(8c) では ‘go’ するのはあくまで ‘agree’ のあとである (‘the action referred to in the infinitive is to happen later’) (Cambridge International Dic. of Eng.)。to 不定詞のときには「同時」ではない。(8d) では、彼が直接手をかして、同じ行動をしているが、(8d’)では、直接手をかしておらず、間接的な手助けしかしていない (Bolinger 1974a: 75)。

ここでは、to なし不定詞のもつ「同時性」・「直接性」、to 不定詞の「非同時性」・「間接性」に注目しておく。

### 1.2.2 知覚動詞のあとの to 不定詞の「間接性」

9. a I feel that someone was touching my arm.  
b I feel someone to be touching my arm.  
c I feel someone touching my arm.

(9a) は that 節、(9b) は to 不定詞、(9c) は現在分詞をふくむものである。Felser (1999: 96) は、(9b) の意味は (9c) よりも、(9a) に「対応する」(‘correspond’) という。つまり、(9b) の知覚動詞 ‘feel’ のあとの to 不定詞は that 節のように「～すること／の」という（「間接的報告」の）意味になることになる。<sup>(1)</sup> このことは、つぎの文、

10. a I saw it to be true.  
b I saw that it was true.

について、Bolinger (1974 a: 66) が、(10a)、(10b) の意味がおなじであるといっていることと符号する。また、この場合の ‘see’ は ‘understand’ という意味であるとしていることも重要である。「命題」そのものは「見る」ことはできない (Akmajian 1977: 455) のである。小西 (1985: 1343) は、‘to be’ のついてるほうが「より間接的な知覚」・「精神的知覚」をあらわすとする。‘see~to~’ は「‘see that’ の意味に接近」(‘semantically more closely related’ Felser 1999: 32, ‘semantically similar’ Kirsner & Thompson 1978: 152) し、‘see’ は「わかる」の意味であることに注目しておこう。(11)として類例をあげる。

11. a I saw it to be impossible.

- b I saw him to be a complete charlatan.
- c The old man could see that he was very tired.

以上のことからつぎのことを確認しておこう。

- ①知覚動詞 'see' のあとの to 不定詞は、that 節のような「～すること／の」(McCawley 1978: 280) (cf. 久野 1973: 140-41) という意味になること、
- ②このときの 'see' は「わかる」('understand') の意味であること。

Palmer (1987: 189) が、to 不定詞がつづく知覚動詞はつねに「報告の意味」(reporting meaning) をもち、'see~to~' は「see that~」の意味であり、直接知覚的な意味で解されることはない、という趣旨のことをのべていることも、つよく①、②のまとめを支持していると考えられる。

### 1.2.3 'see' の受動態と to 不定詞

#### 12. John was seen to leave.

すでに見たように、知覚動詞のあとの to 不定詞は、that 節のように「～すること／の」という意味をもつ。(12)では 'to leave' は「J. が去ること／の」ということになる。これと同時に 'was seen' は 'was understood' という意味になる。Higginbotham (1983: 124) がこの(12)について「認識的解釈しかできない。べつのことばでいえば、「だれかが、J. が去ったこと／のを知った」('only epistemic interpretation, in other words,...it amounts to 'Somebody saw that John left.')(ここで「認識的とは「間接的・精神的」の意味である)ということとも一致する。

さらに、Felser (1998: 366) はすでにあげた (7c) ((13)としてくりかえす)

13. John was seen to draw a circle. (=7c)

について、「to 不定詞では直接知覚の読みはなくなる」(‘the direct perception is lost with full infinitive’) とのべているが、これは、われわれが知覚動詞のあとの to 不定詞にみてきたことと適合する。

以上で、われわれが問題にしてきた構造の性質が、知覚動詞、その受動態、to 不定詞のそれぞれの面から明らかになった。

1.2.4 Kirsner (1977)、安井 (1996)

以上の議論をふまえて、一つめの論点、Kirsner(1977)、(ついでこれを踏襲した) 安井 (1996) について検討する。

1.2.4.1 Kirsner (1977) について：その評価

14. a ?Nureyev was seen by thousands to dance in the concert hall. (=1a)  
b Nureyev was seen by a reporter to leave by the side door. (=1b)  
c John was seen to draw a circle. (=7c)  
d \*Nureyev was watched to leap across the stage. (=7b)

すでに、見てきたところからも明らかのように、(14a) と (14b) の許容度がちがうのは、Kirsner (1977) がいうように、(14a) では知覚動詞の受動態 ‘was seen’ のもつ「偶然性」と、多くの人たちが N. のダンスを見るためにでかけていく、という表現が意味的にあわないからではない。また、(14b) が許容されるのは、‘was seen’ がもつ「偶然性」と、N. が横口からでる、という「予期しない」できごとが一致するからでもない。

知覚動詞のあとの to 不定詞には、that 節のような「～すること／の」のような意味があり、そのときの ‘see’ には「～がわかる」という意味になることはす

で確認した。つまり、(14b)は「N.が横口からでたこと／のがレポーターに知られた」、(14c)は「J.が円を描いたこと／のが知られた」という「間接的・精神的知覚」をつたえる、正しい解釈をもつ文となる。これこそが(14b)、(14c)が許容される理由であるはずである。

また、(14d)が許容されないのは、to不定詞のもつ「～すること／の」に対して、‘watch’には「わかる」という意味がないからである。「‘watch’は「理解する」の意味には用いられない」(小西1985:1717)のである。<sup>(2)</sup>

では、許容度のひくい(14a)はどうであろうか。Kirsner(1977a)自身がのべているように、この文では、多くの人はダンスを見るためにでかけている。N.もそのつもりでダンスをしており、ここでの‘see’は(14b)の‘see’とはちがひ、はっきり「意図性」をもっている。つまり、「(たまたま)目にする」ではなく、むしろ‘watch’にちかくなっているといえよう。‘see’には「(たまたま)目にする」という「無意志動詞」としての使い方から、‘see a movie’のように、‘watch’にちかい「意図性」のつよい(cf.‘watch TV)意味もあるのである。このことこそが(14a)の許容度をひくくしていると考えられる。<sup>(3)</sup>

Kirsner(1977)では、知覚動詞の検討が一面的であることに加えて、to不定詞、とりわけto不定詞と知覚動詞の関係に関する議論が不足しており、問題の構造の性質をとらえているとはいいがたい。

#### 1.2.4.2 安井(1996)について：その評価

15. \*She was watched to go out of the room.

上の議論から、(15)の非文性は、to不定詞のもつ意味、「彼女が部屋をでること／の」に対して、‘watch’にはそれをうける「～がわかる」という意味がないためであることは明白である。ところが、安井(1996)はこの点についてはなにもふれていない。

安井(1996:542)は、(15)の非文性は‘watch’という動詞のもつ「意図性」が、



知覚動詞の受動態がもつ「偶然性」と「衝突する」からだという。

しかし、これでは、「‘was watched’ という表現がありえない」といつていることになる。これは事実に反する。

16. a John was watched crossing the road. (=7d)  
b Tom was watched playing the puppets by the children.

(16)では‘was watched’があり、許容される文である。安井(1996: 542)は(16b)の文について、ここでは‘was watched’のもつ「偶然性」が「いわば棚上げするような場面的根拠があたえられているため」許容されているのだという。これでは、(15)、(16)の性質がとらえきれていない。(15)が非文で(16)が許容されるのであるから、(15)、(16)の許容度のちがいは、(15)の to 不定詞と(16)の現在分詞のちがいが非文の原因ではないか、という検討にすすむべきであった。安井(1996)にはこの議論もない。安井(1996)は Kirsner (1977) をそのまま受け入れ、それに固執したために、さらに問題の本質からずれてしまった。

## 2. They saw her go. の受動態

ここでは、二つめの点、表題の文の受動態として‘She was seen go.’はないのか。ないとすればその理由はなにか、について考える。

17. a They saw her go. (=2a)  
b She was seen to go. (=2b)  
c \*She was seen go. (=2c)

(17a) の受動態は (17c) ではなくて、(17b) だといわれてきた。不定詞に‘to’のある・なしは大きな意味をもつはずのものであるにもかかわらず、(17a) にはない‘to’が、(17b) ではでている。

2.1 She was seen go. は存在しないのか。

このことについて、まずいくつかの意見をみよう。

18. a 'there is no verb in the passive that has a bare infinitive.'  
Quirk et al. (1972: 841)
- b 'unusual' Bolinger (1974a: 86)
- c 'not very firmly established', 'marginal'<sup>(4)</sup> Bolinger (1975a: 399)
- d 'ungrammatical' Higginbotham (1983: 124)
- e 'not allow passivization of the subject of an infinitival complement to a perception verb' Bennis & Hoekstra (1989: 37)
- f 'perceptual reports lack a passive counterpart.' Felser (1998: 366)

以上に見るように、(17c)の存在には圧倒的に否定的である。Felser (1998)、(1999)にいたっては、その存在をはっきり否定し、つぎのような「制約」('constraint')を設定する。

19. a The constraint against passive  
The subject of direct perception complements does not passivise.  
Felser (1998: 366)
- b The constraint against passive  
Perceptual reports do not passivise. Felser (1999: 81, 180)

このことから、(17a)には(17c)のような受動態は存在しえないことがわかるが、Felser (1998)の「直接知覚補文の主語は受動化しない」とは、(17a)の補文 'her go' の 'her' を主語にした受動文はないというのであるから、この「制約」はもう一つ重要な、つぎのことをいっていることになる。つまり、

20. (17b) 'She was seen to go.' は (17a) 'They saw her go.' の受動態ではない。<sup>(5)</sup>

すでにみたところから、(17b) は「彼女がでかけたこと／のが知られた」という「間接・精神的知覚」の文であり、また (17a) は「彼らは彼女がでかけるのを見た」という「直接知覚」の意味の文であり、(17b) と (17a) が意味がことなるべつの文であるというのはまちがいでない。

## 2.2 She was seen go. という受動態が存在しない理由はなにか。

そもそも受動態というものはどんな場合に使われるのであろうか、という点から考えてみる。Jespersen (1976) では、受動態はつぎのような場合に使われるといわれている。もっとも一般的な例をあげる。

21. a Her father was killed in the Boer war.  
b He was elected Member of Parliament for Leeds.  
c Enough has been said here of a subject which will be treated more carefully in a subsequent chapter.  
d The house was struck by lightning.  
e He rose to speak, and was listened to with enthusiasm by the great crowd present. Jespersen (1976: 120-121)

(21a) は能動主語がわからない場合、(21b) は能動主語が明白な場合、(21c) は能動主語をあげたくない場合 (責任の所在をぼかすなど)、(21d) は能動主語よりも受動主語に関心がある場合、(21e) は文のつながりをよくする場合、などである。ところが、これらのどれも (17c) 'She was seen go.' という受動態が存在しないことを説明してくれるとは思われない。

ただ Bolinger (1974 a : 86) は知覚表現について、つぎのようにのべていることが参考になる。

22. The passive tends to be used in situations where the interest is not in perception but in impersonal facts,...if the interest is in what is sensed, it is apt to be in the one who senses it also and the active is better suited.

この指摘はきわめて重要である。つまり、関心が知覚そのものよりも、個人と関わりがない事実そのものにある場合には受動態になりやすい。もし関心が知覚されるものであれば、それを知覚する人にも関心が向きがちであり、そのときには能動態がより相応しい、というのである。

すなわち、「知覚」がなりたつには、知覚する人と、知覚される対象が必要であるが、この両者に関心がある場合には能動態が相応しいというのである。<sup>(6)</sup>

具体例でみることにする。いま、知覚する人たち（「彼ら」）がおり、知覚される対象（「彼女がでかける」場面）がある場合を考えてみよう。Bolinger (1974 a) にしたがえば、この場合、「彼ら」を主語にたてた能動態の文、つまり (17a) の 'They saw her go.' がより相応しい ('better suited') ということになる。これは Kuno & Kaburaki (1977) の「感情移入」(empathy) からみても適切であるといえる。

これは (17c) 'She was seen go.' が存在しないことに対する、いわば「消極的」な理由であるが、(17c) が存在しない、さらに「積極的」な理由がある。

さきに Jespersen (1976) の受動態を使う理由をあげたが、その動詞に共通にみられることがある。それは「受動主語」は、動詞のあらゆる行動・動作によって何らかの「影響をうける」(affect) ということである。'kill'、'strike' をはじめとして、受動主語は、いずれも何らかの形で影響をうけていると考えられる。<sup>(7)</sup> 受動主語は、動詞によって影響をうける「被害者」(patient) でなければならぬとして、Bolinger (1974 b)、(1975 b) はつぎのようにいっている。

23. a '...a true patient, i.e., to be genuinely affected by the act of the verb' (1974a: 67)

知覚動詞の受動態 (葛西清蔵)

- b 'a patient that is somehow affected by the action' (1975b: 14)  
(以上下線引用者)

知覚動詞の受動態についても例外ではありえない。つまり、(17a) 'They saw her go.' についていえば、知覚される 'her' は 'saw' されることによって何らかの影響をうけるのでなければ、'She was seen...' という受動態はつukれないことになる。

では、はたして「彼女」は「彼ら」に「見られる」ことによって何らかの影響をうけるであろうか。「ただ見られるということによって何らかの影響をうけるということはどうしてありえよう」('how can anything be affected by being merely seen?') (Bolinger 1974b: 74) ということになる。この点では、

24. a The man resembles the famous actor.  
b \*The famous actor is resembled by the man.

だれかに「似る」('resemble') ことによって、その 'actor' はなんら影響をうけることはないから、(24a) に対して (24b) という受動態が存在しないのと同じ理由によって、「非意図的」な 'see' をもつ (18a) 'They saw her go.' には (18c) 'She was seen go.' という受動態は存在しないことになる。<sup>(8)(9)</sup> これは(21)を支持することにもなる。

さらに、補足的にもう一つの理由をあげよう。

さきに Bolinger (1974 a : 86) は「知覚そのものよりも知覚の事実に関心がある場合」には受動態が使われやすい、とのべたが、Bolinger (1974 a : 87) は「想像の世界」('an imaginary world') でのこととして、つぎの例をあげている。

25. It was as if we were disembodied. There were perceptions but no perceiver. Impressions came floating into a soundless ear and a

sightless eye. Exotic bells were heard ring, vague forms were seen pass by.

精神と肉体が分離し、知覚者がいないのに、うけた印象だけが、「聞こえない耳」、「見えない目」にただよってくるというのである。<sup>(10)</sup> これはまさに現実の世界ではおこりえないことであり、文法書で「この種の文は存在しない」とするのも「不思議ではない」(Bolinger 1974a: 87) ということになる。

以上が (17c) ‘She was seen go.’ が存在しない理由である。一方、知覚する人より知覚の事実に関心があるときには、(17a) と意味はちがうが、to 不定詞をもつ受動態 (17b) ‘She was seen to go.’ を使うより方法がないことになる。

(18a) の受動態が、(17a) とは意味がことなる (17c) ということになったのは、

#### 能動態

26. a They saw John draw a circle.  
b \*They saw John to draw a circle.

#### 受動態

26. a’ \*John was seen draw a circle.  
b’ John was seen to draw a circle.

これらの文のうちで、許容される (26a)、(26b’) が対をなすと誤解されてきたためであろう。

### 3. まとめ

以上、知覚動詞の受動態をめぐって、つぎの二つの点を論じた。

①知覚動詞の受動態は「偶然性」の意味をもつとする Kirsner (1977 a) の議論は、知覚動詞の検討不足にくわえ、to 不定詞の意味・機能を考慮しておらず、きわめて不十分なものであること、

②‘They saw her go.’ は「彼らは彼女がでかけるのを見た」という「直接知覚」の文であり、‘She was seen to go.’ は「彼女がでかけたこと／のが知られた(わかった)」という「間接・精神的知覚」の報告であり、これらは意味のことなるべつの文であること、‘They saw her go.’ には受動態がないこと、またその理由、についてのべた。

ここでは、とくに‘see’についてみたが、ほかの知覚動詞、また to なし不定詞をとる使役動詞の受動態については今後の研究課題としたい。

## 註

(1) Borkin (1973 : 46) にもこのような主張がみられる。

- i I find that the chair is comfortable.
- ii I find the chair to be comfortable.
- iii I find the chair comfortable.

(i) は、消費者の反応テストの結果を報告するとき、(ii) は、消費者の反応を知るためにファイルを調査したとき、(iii) は、自分の経験でわかったときの表現だという。なお、to 不定詞と that 節一般については Riddle (1975) を参照。

(2) ‘watch’ は「～ということ／の」という意味の that 節をとることはできない。‘watch’ には目的語としての「that 節は不可」(小西 1985 : 1719) である。

- i Watch that he doesn't fall.

(i) は「倒れないように気をつけよ」ほどの意味で、that 節は副詞節である。また、(ii)、(iii) を参照。

- ii \*We watched that John left.
- iii \*John was watched (to) draw a circle. Felser (1999: 31)

(3) ‘see’ には、「意図性」のよわいものから、「意図性」のつよいものまで「連続性」(小西(1985:1332) (‘a great semantic range’ Bolinger 1974b: 75’) があり、(14)にみる、この非文の段階性は、

i (14b)、(14c) > ? (14c) > \*(14d)

となるが、‘watch’ のもつ「(じっと)見つめる」という「意図性」、(14b)、(14c) の‘see’ の「(たまたま) 目にする」という「非意図性」、また、どちらともいえる(14c) の‘see’ という点からみると、(i) の段階性は、知覚動詞のもつ「意図性」の段階性でもあるようである。

(4) ‘not firmly established’、‘marginal’ とは、Bolinger (1975: 399) によると、この種の文で許容されるのは‘go’、‘leave’ などにかぎられる、きわめて一般性のないものである、ということである。

(5) このことについて、Felser (1999: 96) は ‘to-PVCs in the passive semantically and syntactically pattern with fully infinitival complements in active structures rather than with BI clauses’ (PVC: perception verb complement, BI: bare infinitive) といっている。

(6) 経験者と経験されるもの、という二つの項をとる動詞の場合には、経験者の視点から文を組み立てるのが普通である。このことも関係あるかも知れない。

i Pictures of himself<sub>i</sub> don’t bother John<sub>i</sub>.

ii \*Pictures of himself<sub>i</sub> don’t portray John<sub>i</sub> well.

iii Each other’s health worried the students.

iv \*Each other’s friends murdered the men. 葛西 (1998)

(i)、(iii) では、それぞれ‘bother’、‘worried’ を経験する ‘John’、‘students’ を中心にして「逆行照応」がなされている。

(7) i The bed was slept in.

ii \*The station was arrived at.

iii The conclusion was arrived at by five o’ clock. (Bolinger 1974b: 68)

(i) では、ベッドになにか寝た形跡があり、(ii) では、駅に列車が到着してもなにも影響はないが、「結論」といいうものは「達して」はじめて生まれるもの



である。

(8) Mittwoch (1990:118) は、受動主語について、‘a person or some other agent that normally participates in events’ といっているのもおなじ趣旨のことをべつの面からのべたものと考えれことができる。

(9) i Tom was watched playing the puppets by the children.

(i) が許容されるのは、Tom がなんらかの意味で「影響 (affect)」されているからか、

ii They are seen (to be) moving.

(ii) では「間接報告ないし精神的な理解」(小西 1985:1332) だからであろう。

(10) ここに ‘to’ をいれると、‘too “conscious”’ になるという (Bolinger 1974a: 87)。

これは「直接性」がなくなるということであるはずである。

### 参考文献

- Akmajian, A. 1979. “The complement structure of perception verbs in an autonomous syntax framework” Culicover, P. W. et al. (eds.) *Formal Syntax* 427-460 Academic Press
- Bennis, H. & T. Hoekstra 1989. “Why Kaatje was not heard sing a song” Jaspers, E. et al. (eds.) *Sentential Comlementations and the Lexicon* Foris Publications
- Bolinger, D. 1974a. “Concept and percept: Two infinitive constructions and their vicissitude” *World Papers in Phonetics* Festschrift for Dr. Onishi’s Kiju 65-91. The Phonetic Society of Japan
- Bolinger, D. 1974b. “On the passive in English” *The First Lacus Forum* 57-76
- Bolinger, D. 1975<sup>2</sup>a. *Aspects of Language* Harcourt
- Bolinger, D. 1975b. “Meaning and form” Koerner, E. F. K. (ed.) *The*

*Transformational Generative Paradigm and Modern Linguistic Theory*

3-35 John Benjamins Pub. Company

- Borkin, A. 1973. "To be and not to be" *CLS* 9, 44-56
- Declerck, R. 1982. "The triple origin of participial construction verb complements" *LA* 10, 1-26
- Felser, C. 1998. "Perception and control: a Minimalist analysis of English direct complements" *J.Linguistics* 34, 351-385
- Felser, C. 1999. *Verbal Complement Clauses* John Benjamins Pub. Company
- Higginbotham, J. 1983. "The logic of perceptual reports: an extensional alternative to situation semantics" *J.Philosophy* 80, 100-127
- Jespersen, O. 1976. *Essentials of English Grammar* George Allen & Unwin Ltd.
- Josephs, L. S. 1976. "Complementation" *Syntax and Semantics* 5, 307-369
- 葛西清蔵 1998. 「分詞構文の主語と「逆行照応」」『英語語法文法研究』第五号 139-146
- Kirsner, R. S. 1977. "On the passive of sensory verb complement sentences" *LI* 8, 173-179
- Kirsner, R. S. & S. Thompson 1976. "The role of pragmatic inference in sensation: a study of sensory verb complements in English" *LI* 8, 173-179
- 安井 (編) 1978. 『海外英語学論叢 1978 年版』 144-190 英潮社
- 小西友七 (編) 1985. 『英語基本動詞辞典』 研究社出版
- 久野暲 1973. 『日本文法研究』 大修館書店
- Kuno, S. & E. Kaburaki 1977. "Empathy and syntax" *LI* 8-4, 627-672
- McCawley, N. A. 1978. "Epistemology and Japanese syntax" *CLS* 14, 272-284
- Mittwoch, A. 1990. "On the distribution of bare infinitive complements in English" *J.Linguistics* 26, 103-131

Palmer, F. R. 1987<sup>2</sup>. *The English Verb* Longman

Quirk, R. Greenbaum, S. Svartvik, J. 1972. *A Grammar of Contemporary English* Longman

Riddle, E. 1975. "Some pragmatic conditions on complementizer choice"  
*CLS* 11, 467-474

渡辺登士ほか (編) 1983. 『英語語法事典・第三集』大修館

安井稔 1996. 『コンサイス英文法辞典』三省堂